

「命を守るために」 教職員たちの模索

2019年9月11日(水) NHKニュース おはよう日本



失われた命の意味

震災 8年半
“命を守るか。問われる学校防災”

東日本大震災の発生から、きょう（11日）で8年半。震災では、多くの子どもたちの命が津波などで失われました。災害が起きたときに、子どもの命をどう守っていくのか、全国の教育現場が課題に直面しています。

宮城教育大学が防災力を高めようと、ことし（2019年）初めて開いた研修プログラム。全国各地から20人余りの教職員が参加しました。訪れたのは、児童74人が津波の犠牲となった大川小学校。この学校で次女を亡くした佐藤敏郎さんが教職員たちに、失われた命の意味を語りました。子どもの命を守る責任。参加者たちは、その意識を見直す必要性を感じていました。



1校でも同じような大川小のような悲しい出来事を作ってはだめだと思う

震災 8年半
“命を守るか。問われる学校防災”

参加した教職員

参加した教職員「1校でも大川小学校と同じような悲しい出来事を作ってはだめだと思うんです。」「自分たちも命を守りながらいろいろな学習をしていますが、子どものためじゃないのでは、というときがやっぱりあると思う。」

研修では、徹底した備えが多くの児童の命を救った現場も訪ねました。校舎が屋上まで津波に襲われるなか、学校にいた児童91人をいち早く高台に避難させた宮城県南三陸町の小学校。出迎えたのは、震災のとき校長だった、麻生川敦さん。麻生川さんは命を確実に救えるマニュアルにしよう、常日頃から教職員が話し合っていたからこそ、児童の命を守れたと強調しました。



震災 8年半
“命を守るか。問われる学校防災”

高知市立横浜小学校教頭 下坂美和さんは日頃から防災教育に力を入れてきましたが、被災地での研修に参加後、もう一度、備えを見直すことにしました。その一つが、防災マニュアルの見直し。これまで、津波の際の避難場所は校舎の3階としていました。下坂さんは、別の場所もマニュアルに盛り込もうと、地域住民の避難場所である周辺の高台を見に行きましたが、全校児童の3分の1が避難できるかどうかという、想像以上の狭さでした。一方で、広い高台を目指せば徒歩20分以上かかり、避難が間に合うのか課題も浮かび上がりました。



震災 8年半
“命を守るか。問われる学校防災”

検討の結果、低学年の児童は近くにある地域住民の指定避難場所に。また、素早く移動できる高学年は遠い高台に避難する選択肢を盛り込みました。しかし、マニュアルが複雑になるほど、教員の理解度が問われることになります。防災の意識をどのように高めていくのか。教職員一人ひとりが問われていると、下坂さんは感じています。「教員に必要なのは、私個人の考えとしては、子どもの命をどのように守るか、ということです。そのためには覚悟が必要です。その覚悟を持つためには、日頃からの準備を持つことが必要だと思います。」



学校の危機管理に詳しい
東京学芸大学
渡邊正樹教授

教職員自身も
子どもの命を守ることを
最優先と考えて
業務を進める必要がある

震災 8年半
“命を守るか。問われる学校防災”

再び悲劇を繰り返さないために、事前の備え、しっかりとした防災マニュアルが必要です。しかし、全国のおよそ9割の学校でマニュアル自体は整備しているものの、災害から確実に子どもの命を守れるのか、内容が精査されていないものも少なくないといいます。

東京学芸大学 渡邊正樹教授「学校だけで防災力を高めるのは限界があり、行政や専門知識を持つ機関がサポートすべきだ。その上で、教職員自身も子どもの命を守ることを最優先と考えて業務を進める必要がある。」